

【優秀賞】

当たり前の水

岩沼市立岩沼中学校

二年 松^{まつ}野^の 霽^{はら}

どこにでもあり、いつでも手に入る「たかが水」。それが前までの私の水への考え方でした。喉が乾けば水を飲む、手を洗う時に蛇口をひねれば水が出る。それは日常生活において当たり前、誰もがそう考えているはずだと思っていたのです。

しかし、今年の三月十一日。母から聞いたある話で、私の水への考え方が変わりました。

三月十一日。それは誰もが知る『東日本大震災』が起きた日です。その当時の私はまだ〇歳、当然ひとりでは動けません。そんな私を抱え、母は地震が続く中、安全な場所まで避難しました。

情報が手に入りにくい中、津波の接近。母や他の大人たちはその情報から、水の恐ろしさを悟ったそうです。

幸い、私たちがいたところまでは津波は来ず、翌日家に戻れました。

しかし、水は止まり、電気も来ず、さらに水道の復旧工事は市の中でもかなり遅れ、いつもは手を伸ばせば手に入った水がなかなか手に入らないという状況に立たされました。そのときに、被災者はみな水の貴重さというがたみに気付いたそうです。

震災から三日目には母の友達が物資を届けに来てくれました。それも青森からとても時間をかけてきてくれたのです。母がなぜ混乱の中ここまで来てくれたのかを尋ねると、その友達は、

「大人はまだ我慢できるけれど、まだ小さい子にはミルクを飲むにも体を綺麗にするにもたくさんの清潔な水が必要だから、被害を受けていない自分が届けに来た」

と言い、〇歳の私のために、水道が復旧してからもしばらくはたくさんの水をくれたそうです。

母は昔から友達が多かったそうです。よく海へと遊びに行っていたようですが、その思い出と共に、海の近くにあったものは全て流されてしまいました。その事実を受け入れがたく、現地に行くのは躊躇っていた母の背中を押したのは、母の祖母でした。

「片付けられる前に一回見てきなさい。このことを覚えていけるのは私たちのような経験した人間だけなんだよ。」

そう母に語りかけ、わざわざ沿岸部に連れて行ったそうです。

そこで母が見たのは原型をとどめていない建物の瓦礫、家に乗りがつた船、一夜にして変わり果てた景色でした。絶望感が押し寄せてきたと同時にこれは絶対に語り継がなければならないと思ったそうです。

このような話を聞き、私は震災のことをもつと知らなければならないと思うと共に、当たり前だった水は私たちが生きるために絶対に必要で、本当は簡単に手に入らないこと、時には自然の厳しい一面も見せることに気づかされました。

水は資源というものの以上に、私たち地球の生物の命そのものと言えるかもしれません。

水を守る、大切にするというのは自分たちの命を守ると同じこと、水の使い方を誤れば人間の命を奪う凶器になってしまいます。

自然災害のように、時折暴走してしまうこともあります。それに対して少しでも被害を食い止めるための対策と予防を実行していかなければいけません。

つまり、水の利便性と危険性を理解して、正しく安全に使わなければならない。それが、私たちの水を使うことへの責務だと思います。

私は母の話から多くのことを考えさせられ、たくさん学びました。この貴重な話から学んだことを心に刻み、穏やかで恩恵をもたらしてくれる「水」を大切に、いつまでも「当たり前」にしていきたいものだと考えたのです。